

3 全体会パネルディスカッション テーマ「三遠南信地域の将来像」

登壇者一覧

(敬称略)

役割	所属	氏名
コーディネーター	静岡文化芸術大学副学長／ 第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員長	池上 重弘
パネリスト	浜松商工会議所会頭／SENA 副会長	大須賀 正孝
パネリスト	地域づくりサポートネット代表理事／ 三遠南信住民ネットワーク協議会代表世話人	山内 秀彦
パネリスト	愛知大学教授 三遠南信地域連携研究センター長	戸田 敏行
パネリスト	阿南町長／愛知・長野県境域開発協議会員	勝野 一成
パネリスト	浜松市長／SENA 会長	鈴木 康友



司会

平成20年3月に策定されました三遠南信地域連携ビジョンが10年という期間の満了を迎え、次のビジョンを策定することとなりました。そこで、本日は新ビジョンに向けて、市民団体や産学官の代表者をお迎えして、「三遠南信地域の将来像」をテーマとしたパネルディスカッションを行います。パネルディスカッションのコーディネーターは、静岡文化芸術大学の副学長であり、第2次三遠南信地域連携ビジョンの策定委員長でもあります、池上重弘

様にお願いいたします。

それでは、御議論をいただく前に、SENA 事務局長の久米より、今回のサミットのテーマともなっております新ビジョンの策定に関する説明をさせていただきます。

SENA 久米事務局長

本年度から開始しました第2次三遠南信地域連携ビジョン策定の状況について、御報告申し上げます。

まず、策定方針でございますが、基本的な考え方は、現行ビジョンを基本とし、地域の状況の変化を踏まえた新ビジョンへと更新してまいります。計画期間はおおむね10年、範囲は、39市町村としております。スケジュールとして、平成30年度の三遠南信サミットで最終報告の予定でございます。

次に、策定体制ですが、第2次三遠南信地域連携ビジョン策定委員会を設

置し、検討を進め、SENA 拡大委員会、そして、本日のサミットにおいて、さらに議論を深めていただく予定でございます。

続いて、三遠南信地域のポテンシャルです。三遠南信地域の人口は都道府県と比較した順位で14位相当、事業所数は15位相当、特筆すべきは、農業生産額の7位相当、製造品出荷額の6位相当です。このほか、年間商品販売額も、17位相当となっております。

続いて、人口推計です。平成27年の国勢調査の結果、この地域の人口は247万人を数えております。これが、10年後の平成39年度においては231万人となり、約15万人の人口が減少する想定でございます。

続いて、人口推計の年齢層割合ですが、高齢者人口は増加傾向にあり、一方で生産年齢人口、年少人口においては減少の一途をたどっております。こうした背景の中、ビジョンを策定するということでございます。

続いて、新ビジョンの目的でございますが、こうした環境の変化を踏まえ、現行のビジョンの五つの目的を次のように修正しております。一点目は、交通基盤整備の進展に伴う交流・連携活動の深化。二点目は、産業構造の転換期を先取りする産業創造力の強化。三点目は、三遠南信地域特有の地域資源の活用による交流人口の拡大。四点目は、流域住民が共生する県境を越えた広域生活圏の形成。五点目は、三遠南信地域の持続的発展を支える人づくり。これらの新たな目的を設定し、新ビジョンの策定を進めてまいります。

新ビジョンのテーマも見直しを行い、「三遠南信流域都市圏の創生」とし、サブタイトルを、「日本の県境連携先進モデル」としております。三遠南信地域は、天竜川、豊川流域を基軸とし、道や鉄道を通じ人々が行き交い、交流することで、都市の発展とともに、歴史を積み重ね、一体的な流域都市圏を形成してまいりました。圏域住民が持続的発展と自立を目指し、この地域を創生するという考えのもと、テーマを「三遠南信流域都市圏の創生」としました。また、この地域で実践されている産学官の連携や地域間交流の取り組みの成果が、やがて日本の県境連携を牽引し、我が国の地方創生に貢献することを目指してまいります。

次に、新ビジョンが目指す地域像です。こちらは、一点目を現行ビジョンから修正しております。国土形成計画においては、リニア中央新幹線の開業により、東京、名古屋、大阪の3大都市圏が一つにつながり、スーパーメガリージョンを形成すると見込まれており、世界を先導する巨大経済圏の形成の中で、本地域は広域連携都市圏の形成を目指すものでございます。

最後に、新ビジョンの基本方針の案でございます。こちらにも、5分野を修正し、新たに「人」の分野を創設してまいります。人の分野は、地域の持続的発展に向けた人材集積地の形成を進めるものでございます。このほか、現行ビジョンで別々でした「山」「住」を一つとして、安全安心な広域生活圏の形成を進めてまいります。本日の分科会では、この基本方針や重点事業につ

いて御意見を頂戴したいと考えております。

新ビジョン策定状況についての報告は、以上でございます。



コーディネーター

静岡文化芸術大学 池上副学長

静岡文化芸術大学で副学長を務めております、池上と申します。私はインドネシアの文化人類学研究、そして最近ではこの地域で増えている外国人と共に地域をどうつくっていくかという多文化共生が専門ではありますが、今回、地元の課題ということで、新ビジョン策定委員会の委員長とこのパネルディスカッションのコーディネーターを務めております。

このパネルディスカッションに先駆けて二点確認したいと思っております。

一つは、この三遠南信地域の枠組みが、県境を越えた広域連携の中でも老舗であるということです。25年の歴史があるだけに、いろいろな先駆的な達成もある一方、様々な課題もほかの地域に先駆けて感じており、それを今回議論したいと思っております。

二つ目は、現行ビジョンの策定から10年が経ち、その節目に当たるということです。道路ができて、リニア中央

新幹線が開通する目途も立ってきました。一方で、2008年のリーマンショックがあって、この地域も大きな打撃を受けました。さらに、2011年の東日本大震災で、私たちは日本という国が非常に大きな災害に見舞われる国なのだと、また、それを契機に人々のきずなについても、改めて感じました。こうした変化の中で、この先10年間を見通して、三遠南信地域の連携がどのようなものになっていくか、あるいはなっていくべきかについて、本日は5名の方に御意見を伺っていきたく思っております。

はじめに、SENA 会長でもある、地元浜松市の鈴木康友市長に、新ビジョンへ向けての御意見を伺いたいと思っております。お願いします。



浜松市 鈴木市長

この三遠南信地域の連携は、大変歴史のある連携でございます。直虎を見ていただくと一目瞭然ですが、歴史的に大変結びつきの強い地域だということがよく分かります。井伊直親は今川氏に追われて、新城市にある鳳来寺を経由して、飯田市の隣の高森町に逃げました。飯田市にも井伊家の末裔が

いらっしやいますし、家康公は三河から来て遠州に根をおろし、この地一帯を拠点として天下取りの布石を打ったわけです。

歴史的にも大変つながりの深いこの地域は、明治になって県の境目が切られ、それぞれ県が分かれました。かつては、国、県、市町村という縦の系列の中で、国や県からふんだんに補助金が交付され、市町村は国や県の言うことを聞いていれば市町村経営ができたという時代でした。しかし、これからは、それぞれの地域が自ら頑張りなさい、国もそういう地域を支援します、という地方創生の時代で、実は大変厳しい時代でございます。10年前、県境を越えたこの地域の連携は、非常に奇異に思われ、何となく特殊な地域という感じでしたが、最近はあまり特殊な地域という感じはしません。この地域以外でも、県境を越えた広域連携が始まっておりまして、この10年の間に大きく時代が様変わりして、逆に言えば、具体的な連携事業を進化させていかなければいけない時代となりました。県境を越えた取り組みの中で、これまでも具体的には防災や産業政策など、いろいろな取り組みをしてきましたものを、これからもっと具体化し、推進していく、実装していく段階に入ってきたのではないかと考えております。

各自治体でそれぞれ連携の体制についての意見は違うと思いますが、共通しているのは、連携事業が必要であるということだと思います。具体的なプロジェクトを進めていってほしいという声も聞きます。新ビジョンは、そう

した具体的なプロジェクトの大もととならなければいけないと考えております。新ビジョンのもとに、具体的な連携事業がどんどん進んでいけば、まさに地方創生時代における県境を越えた連携の先進モデルとして、一層この三遠南信地域の連携が光輝いていくのではないかと思います。

コーディネーター

皆さんもNHKの大河ドラマ「おんな城主 直虎」を御覧になっておられるかと思いますが、あの時代、山を越え、谷を越え、この地域がつながっていたことをよく理解することができました。

また、明治以降に県境がつくられましたが、今、また新たな地方創生の時代の中で、実体的な連携が必要であり、そのために、現在策定中の新ビジョンでは、より具体的なプロジェクトを進めていく方向性を示すといいのではないかと御指摘をいただきました。

それでは、次に、浜松商工会議所の大須賀会頭から、経済界から見たこの地域の未来について、お話を伺いたいと思います。



浜松商工会議所 大須賀会頭

まず、三遠南信自動車道を早期に開通させることが、非常に重要だと思っています。私も前回のサミットで飯田へ行く際に、浜松を午前6時に出発し、午前10時半開始の会議に何とか間に合いました。隣り合った地域にもかかわらず、東京へ行くよりも飯田へ行く方が、時間がかかり、こんなことがあっていいのかといつも思います。気賀にある「おんな城主 直虎」大河ドラマ館への来訪者数も、現在は60万人を超えて80万人を目指すと言っていますが、三遠南信自動車道が開通していたら100万人や120万人もなっていたでしょう。我々のトラックの業界も、東京へは残業なしで行けますが、飯田へ行くのは残業になります。いろいろな分野への波及効果を考えると、三遠南信自動車道や浜松三ヶ日・豊橋道路などの整備は絶対に必要だと思うのです。

もう一つは、人の問題です。浜松商工会議所で調査をしたところ、70%の企業が人手不足だと回答しました。また中小零細企業で廃業してしまうものが30%くらいあり、そのうち後継者がいないために廃業してしまう企業が66%でした。人材不足はこれほど深刻だということです。去年60歳になった人がおよそ150万人いる一方で、去年成人した人はおよそ120万人、去年産まれた人が100万人を切りました。計算していくと、今から20年後には就業者が半分になることになります。私は、このことについて国も県も市も、もう少し真剣に考えないといけないと思います。対応として、「外国人労働者を

受け入れよう」と言うと、治安が悪くなるという理由をいわれますが、衣食住が確保できれば悪いことをする人はいないと考えています。だから私はこの地域で外国人労働者の受け入れをやってみてはどうかと申し上げてきました。もし企業に人手が要らなくなったときには、市町村で衣食住をきちんと確保し、その費用は企業が支払えば困ることは何もない。人口が減れば、経済規模が縮小し、今しっかり対策を打ち出さなければ日本は沈没してしまいます。この地域でルールをきちんと整備して、テスト的に1回行なってみるべきだというのが私の考えです。

コーディネーター

かなりラディカルな発言もありましたが、サミットらしいと感じているところです。

二つ論点があったかと思います。一つは、交通ネットワークの整備がこの地域においては大切で、経済や観光の発展に大きなインパクトを持つはずだということで、物流の最前線で仕事をされている大須賀会頭らしい御指摘をいただきました。

二つ目の論点は、人の問題でした。調査によれば、多くの企業で人手不足や後継者の問題を抱えていること、その具体的な解決案の一つとして、この三遠南信地域で外国人労働者を受け入れてみてはどうだろうかということでした。受け入れにかかわる費用を受益者である企業が負担するとのお話を商工会議所の代表としていただきましたので、私も非常に期待を持って聞きま

した。

それでは、次に、愛知大学の戸田教授に、この地域の交通のこと、人材のことはもちろんですが、面としてのこの地域のことについて、資料をもとにお話をいただきたいと思います。



愛知大学 三遠南信地域連携研究センター 戸田センター長

10年前と比べて、リニア中央新幹線のルートが明快になり、また新東名高速道路も開通し、東西方向のラインが非常に強くなりました。リニア中央新幹線沿いと東海道新幹線沿いをどう進展させていくかという調査で、リニア中央新幹線と東海道新幹線を相互に結び合わせたいとの意向が出ています。そうなると、東海道新幹線の活用方法や、新幹線駅周辺の土地利用も変わってくると思います。

県境域の連携は全国に広がっております。明治になったときに藩を分断されたようなところは、特に徳川系や反政府系の藩、つまり朝敵藩が多く、大体妙なところに県庁所在地があります。こういった地域は全国にたくさんあります。愛知大学三遠南信地域連携研究センターは、文部科学省共同利用・共

同研究拠点事業における「越境地域政策研究拠点」に認定されております。三遠南信地域は県境を越える地域づくりのモデルですので、この地域の連携は、全国に波及していく可能性があるということです。

次に、人材育成のことについてお話をしたいと思います。SENA 関連団体の活動は、民間でも行政でも、文化的なものもあれば、スポーツに類するものもありと多様です。SENA 自体は何を主事業にしていたのかというと、人材育成関連のものでした。「人材育成円卓会議」という場で、市町村長、経済界の代表の皆さんで人材育成について議論され、その会議を通じてまとまったものの一つに、大学生と地域企業の交流促進事業がありました。東三河地域の学生が田原市にあるトヨタの工場を知らないなど、学生が地元の企業を知らないことがあります。そのため、地域にある企業の情報を知らせることが重要だとされました。三遠南信地域には、18の大学があります。学生数を全て足すと、大体2万3,000人ですから、毎年5,000人強の学生が、卒業、入学しているのです。そのうち、三遠南信地域内の出身者が占める割合は約4割で、約6割が地域外の出身者です。また卒業後の地域内への就職数は、統計で見ると約3割で、約7割の卒業生は地域外に出ています。地域外出身の学生たちへどのような情報を発信するのか、あるいは地域内出身の学生をどのように地域に結びつけるのか、これも一つの課題ではないかと思えます。

また、学生はアルバイトに非常に生

活の重点を置いている傾向があります。アルバイトは社会への入り口でもあるのですが、インターンバイトなど、アルバイトをよりデザインすることが一つのやり方ではないかとも提案をされております。

最後にこれからライフスタイルは、学生、就職、引退という3ステージ型から、多ステージ型に変化していきだろうといわれています。企業も変わると同時に、長くなる人生をどのようにしていくか考えなければなりません。2015年と2040年を比較すると、労働力人口は30万人減の約100万人、3割くらい減の見込みです。しかし、働く年限を仮に79歳まで延ばすと労働力は146万人となります。これは、計算上の数字ではありますが、65歳以上が65～75万人となり、労働力人口に近くなります。この世代に生きがいとなる働き方をいかに用意するかが重要です。このようなライフスタイルになると、学生時代だけでなく、生涯いろいろな学びをすることになりますので、学ぶ年代も、分野も広がり、そこに大学が担うべき役割があると考えます。今の話は構造だけですが、考えていく一つの課題ではないかと思っています。

コーディネーター

東京、名古屋、大阪を一つの都市圏ととらえるスーパーメガリージョンの中で、この三遠南信地域がどういった位置づけなのかがよくわかりました。

また、県境をまたぐ広域連携の中で全国を見たときに、この地域に非常にたくさん丸がついていることも、改め

て認識できました。

また、この地域には18大学に学生が2万3,000人いるとのことでした。一つ一つは大きな大学ではないのですが、まとめるとなかなかの規模だと思います。三遠南信地域外からこの地域に学生を呼び込み、また、この地域で学んだ学生になるべくこの地域で就職してもらおうという地域に対するロイヤリティを高める働きかけが必要であり、その中でも、学生に地域の企業を知ってもらう交流の促進、あるいはインターンバイトの御提案をいただきました。

さらに大学はこれまでのように18歳をメーンターゲットとするだけではなく、リカレント教育や生涯学習などを視野に入れ、一旦卒業した人もまた大学で学び直す21世紀的な方向へのかじ取りも大事であると御指摘をいただきました。

それでは、次に、阿南町の勝野町長から県境に接する町から見える三遠南信地域の取り組みの可能性、そして課題についてお話をお願いします。



阿南町 勝野町長

私からは、私どもの町を縦断し、遠州街道といわれている飯田市と豊橋市

を結ぶ重要な国道151号の話をいたします。本日の三遠南信地域連携ビジョンの話も、我々が取り組んでいる愛知・長野県境域開発協議会も、道が全てを解決していくという考えを持っております。道路は非常に大事で、文化、経済の源でもあります。我々の地域にとっては命の源です。阿南町は愛知県と接し、隣村の天龍村は静岡県に接し、峠越えの厳しいところに位置しています。道路事情も非常に厳しく、同じ長野県の飯田市周辺の高校へ行くにも、自宅から通学することは不可能で下宿しなければならない時代もあり、非常に苦勞をしてまいりました。今では通学や、楽に買い物も行ける中で、道路のありがたみを本当につくづく感じてきました。

先人が道路整備の重要性を感じて、県境に接した町村で協議会をつくり、道路の改良促進の運動を始めて40年が経過いたしました。国道151号も整備が進んでまいりましたが、平成23年に愛知県豊根村にある太和金(たわがね)トンネルで大きな落盤事故がありました。当初、大した影響はないだろうと感じていたわけですが、交通に支障が出て、特に阿南町を中心に長野県の町村では、約5割近くの観光来客数の落ち込みがありました。その際に、愛知・長野県境域開発協議会が両県へお願いをし、非常にスピーディーな対応をいただいたわけです。それぞれの町村は県境を挟んでいるものの、昔からの交流があるおかげで顔が見えて、気心が知れた相手同士であったおかげで、パイバス工事、トンネルの新設工事が

急ピッチで実現したわけです。また、三遠南信自動車道の鳳来峡インターチェンジや、いなさジャンクション等ができてくる中で、国道151号を通過して我々の地域へやってくる来客数が、35%と大きく伸びたわけです。阿南町にある道の駅では、かなりの来客数で駐車場が足りないこともあります。さらに今、阿南町にある医療施設や県立病院に愛知県側からやってくる患者数は月に80名を超えており、医師も連携して動けるようになりました。

これらを実現した道路、また両県を巻き込みながら大きな成果をもたらしてきたこの愛知・長野県境域開発協議会は非常に重要なものだと思います。様々な施策の展開を図っていく上で、道路なくして住民の生活は守れないのだろうと常々感じています。三遠南信地域連携ビジョンの中に愛知・長野県境域開発協議会の取組みを加えていただき、さらに三遠南信サミットでも、非常に大きな効果がある道路を中心に議論をするべきではないかと、私は常々感じているわけです。この三遠南信地域における地域基盤のネットワークの成果や情報について、愛知・長野県境域開発協議会の中でも、密に連携をとりながら前へ進めていきたいと思えます。

コーディネーター

県境の山間地域で、道路がまさに命の源だと御発言をいただきました。通学や買い物が、道路が開通することによっていかに便利になったかという具体例を伺いました。また、医療、福祉面でも、

県境を越えた人の行き来が非常に広まってきたということで、この三遠南信地域連携ビジョンは道路を中心に考えるべきだと具体的な御指摘をいただきました。

それでは、パネリストの最後に、地域づくりサポートネットの山内代表理事からお話をいただきます。



地域づくりサポートネット 山内代表理事

私は、本年度、三遠南信住民ネットワーク協議会という組織の代表世話人を務めさせていただいており、住民団体の代表として、本日午前中に行った、住民団体が集まり意見交換を行う住民セッションでのお話をさせていただきます。今年のテーマである新ビジョンの策定に際し、特に中山間地域について考えると、中山間地域に暮らす人だけではなく、その地域から出ていった出身者、親戚縁者、さらには今、盛んに来ている学生や若者、あるいは地域おこし協力隊、支援団体や地縁団体、そういった新しい風や波をいかにこの地域に定着させるか、あるいはその仕組みをどうやって構築していくのか、情報発信をどのように行っていくのが難しい問題であり、それぞれの地域

の住民だけでは解決できないので、三遠南信地域の全体的な取り組みの中でやっていきたいと話が出ておりました。

それでは、私からの提案をさせていただこうと思っております。三遠南信地域は、現行ビジョンが策定されてからの10年、あるいは、これまでの25回のサミットでは、どうしても地域内での議論をしておりました。先ほど愛知大学の戸田先生から、東西を結ぶスーパーメガリージョンのお話がありましたが、南北の連携も考えてもいいのではないかと考えています。日本海と太平洋を結ぶと、三遠南信地域の塩の道がその一部にあたります。そこに自転車旅、サイクルツーリズムの視点を入れてみたらどうかというのが一つ目の提案です。具体的には、太平洋と日本海の350キロメートルを結ぶ、超ロングルートの構築です。起伏の富んだところですが、自然と歴史、日本の原風景が非常に満ちあふれたところを堪能できる日本を代表するルートになる可能性があります。

北海道や東北など、全国各地で300キロメートル超えのロングルートが続々とできており、海外からたくさんの観光客を引き込むための活動も増えております。サイクリストの聖地といわれ、サイクリングで有名なしまなみ海道は全長約70キロメートルです。最近では、四国お遍路の道をつないだり、中国横断道の整備に合わせて宍道湖のある日本海へサイクリングルートをつないだり、広域的な動きが出ております。これをこの地域で考えてみますと、

三遠南信自動車道の整備効果の向上策として、自転車为核心とする連携が考えられるのではないのでしょうか。三遠南信地域内だけではなく、中部横断自動車道も南北に伸びて、高規格道路ができた後の時間短縮効果で、各地の塩の道を訪ね歩くサイクルツーリズムによる人の呼び込み、さらには海外からのインバウンドにもつなげられます。

本年5月に自転車活用推進法が施行され、官民合わせて自転車の活用に向け、積極的に取り組んでいます。静岡県は2020年の東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技の開催地でもあり、静岡県知事がサイクリストの聖地を目指すとのことでサイクルツーリズムに取り組んでおります。こういった状況で、太平洋と日本海を結ぶ南北のサイクリングルートを設定できないかと考えています。

イタリアでは、最近、自転車の活用が過疎地域の対策としても効果があるという話がありました。さらに、長野県では、信州サイクルクロスという日本海から太平洋へつなぐ構想が提唱されている状況からすれば、日本海と太平洋をサイクリングルートで結ぶ構想を民間、あるいは官民連携の中で進めていくことは、あながち不可能な話ではないと思います。

また、南北に走る鉄道、例えば JR 飯田線や天竜浜名湖鉄道天竜浜名湖線も有効活用し、さらにリニア中央新幹線が開通すると、飯田が一つのハブ機能を果たし、当然自転車でも、輸送が盛んになってきます。大汗をかいて全部走るのでなく、自転車と鉄道を組

み合わせて楽しみながら走るサイクルツーリズムがこれから日本でも普及することが見込まれています。

さらに、遠州地域、東三河地域はものづくりの盛んな地域です。最近、電動アシスト自転車の1回のフル充電による走行距離が100キロメートルを超えました。性能のいい自転車、デザイン性が優れた自転車がどんどん増えてきています。電動アシスト自転車で走れるとなれば、比較的高齢の方も坂道を平気で走ることができ、走行距離も長くなります。そうすれば、のんびりとしたサイクルツーリズムが楽しめるし、鉄道を織り交ぜることで異なる風景を楽しむことができると思います。

これまでも自転車による交流は行われていました。遠州ではロード・オブ・ザ・ソルトという活動や、県の事業で実際に走りながらつくった塩の道サイクリングロードマップや、浜松市にある自転車店では、本年度で33回目を迎えた新潟県糸魚川市まで行く「サバイバルサイクリング」というイベントを毎年やっている実績もあります。本日の住民セッションでは、そういった活動をサイクリングが盛んな渥美半島の伊良湖までつなげてほしいとの話もありました。そうすれば、三遠南信地域が非常に楽しい圏域になり、さらに道や鉄道を活用しながら取り組んでいくと、交流人口の拡大策の一つとなり得るのかなと思います。国や長野県へも働きかけて、諏訪湖との交流など、少しずつですが、実際にやり始めています。

コーディネーター

三遠南信地域のトライアングルの外縁をどう延ばしていくか、また延ばしていくことによって、三遠南信地域への人の流れをどう引き込むかというお話をいただきました。先ほど、この会が始まる前に山内代表理事もサイクリストのお一人だということを伺い、非常に説得力のある御提案だと改めて感じました。

この地域は、山あり、谷あり、温泉もあり、美味しい食べ物もあり、地域の人々の生活に触れることもできて非常に魅力的ですし、また、鉄道や電動アシスト自転車を利用すれば、比較的年齢の高い人たちも、サイクルツーリズムを楽しむことができるという、夢の広がるお話をいただきました。

それでは、最後に、皆さんの御意見を踏まえて、SENA 会長の立場で、浜松市の鈴木市長にコメントをお願いしたいと思います。

SENA 会長 浜松市 鈴木市長

皆さんからいろいろな御意見をいただきました。共通しているのは、県の境目は意味がないのではないかという点だと思います。明治22年、市制町村制ができた当時の市町村数は1万6,000弱に対し、現在は大体1,700強ですから、およそ10分の1になっています。

一方で、府県は、統合と分離を繰り返し、明治21年に香川県が徳島県から分離独立をして47になって以後130年以上、変わっていません。また、戦前は、官選知事が国から派遣されていました。つまり、府県があることが、い

かに中央集権的な統治に非常に便利だったかということなのです。ただ、現在は、そういうものが意味をなさなくなってきた時代だと思います。行政境を越えた取り組みを、より一層具体化させて推進していくことが必要だろうと改めて思いました。新ビジョンの中では、そうしたことを盛り込みながら、実体のある連携を推進していきたいと思えます。

この後の分科会でも、皆さんから様々な御意見を頂戴できると思えますので、そうした御意見を参考にしながら、有意義な新ビジョンを策定していきたいと思っております。

コーディネーター

それでは最後に私からごく簡単に、まとめにかえてコメントを申し上げたいと思えます。

阿南町の勝野町長のお話からも、また、浜松商工会議所の大須賀会頭のお話からも、道路の開通が、経済、観光に対する大きなインパクトを持つことが強調され、この地域は何と言っても道路が革新的な重要性を持つことは、皆さん御了解いただけるかと思えます。

一方で、最後の山内さんのお話からは、道路ができて、高速で広域に動く時代に下道をどう考えるかという、新しい視点をいただきました。そこにゆっくりと人が動くことで、よそから来た人と人がつながっていくことができます。

また、戸田教授がおっしゃったように、この地域の大学にやってきた三遠

南信地域外の出身者、あるいは三遠南信地域に残って大学に進学した人たちが、地域の企業と顔の見える関係になり、この地域のよさを再発見して、この地域で生きていくために、人と人とのつながりをもっと具体化していくことも必要ではないかと思いました。

鈴木市長からは、この地域の歴史的な結びつきは明治の時期に分断されたけれども、21世紀の新たなビジョンの中で、昔からあったその結びつきを深めていこうと決意表明をいただきました。

大変短い時間でしたが、5名のパネリストの方から、それぞれの観点からの貴重な御意見を賜ることができました。皆さん、どうもありがとうございました。